

## 【活動報告】

## ジェンダーと科学研究会

杉本光衣<sup>1</sup>・鶴田想人・藤原諒祐・村瀬泰菜・須田千晶

## 研究会の目的

ジェンダーと科学研究会は、科学史・科学哲学とジェンダー論・フェミニズムとの関係を探り、新しい視点から科学史・科学哲学を学ぶことを目的としている。ジェンダーやフェミニズムは単なる社会的・政治的な問題ではなく、知識のあり方とも深い関係をもっている。例えば、フェミニズム科学論は、自然科学のように客観的と思われる知識においても、知者の社会的立場や視点が反映されていることを明らかにしてきた。このような関心から、英語圏のフェミニスト科学哲学をはじめとし、ジェンダーと科学の関係についての研究が進んでいるのである。日本においては、日本語文献が多いとはいえない状況にあり、さらなる発展が期待されている。本研究会では、主には英語・日本語の文献を扱いながら、知識の正当性から私たちの研究環境まで広い関心を共有することを目指している。

## 活動状況

研究会は月に一度を目安に開催中である。2021年現在、11名が参加しており、参加者のジェンダー比は半々にて構成されている。会の内容は参加者の興味・関心に応じて柔軟に変更しているが、現在のところは二部構成で進めている。

## ①テキストに関するディスカッション

事前に指定のテキストを読んだ上でディスカッションを行う。現在は *Whose Science? Whose Knowledge?: Thinking from Women's Lives* (Harding, 1991) を題材としている。

---

1 本研究会に関する問い合わせ先は杉本まで。E-mail: mi.sugimoto23@gmail.com

## ②参加者による発表

参加者による発表では、扱うテーマやテキストは参加者の関心に応じて決定する。具体的なテーマとしては、フェミニスト科学論・科学哲学・分析哲学・歴史などが挙げられる。参加者の研究分野も歴史・哲学・社会学・科学技術コミュニケーションなど多岐にわたっているため、お互いの研究背景や専門知識を共有しながら議論を進めている。

参加者による発表で扱った文献ならびに内容要約は以下の通りである。

## ○ Anderson, E. (2020). *Feminist Epistemology and Philosophy of Science. The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2020 Edition).

本研究会では最初に、『スタンフォード哲学百科事典』の一項目であり、フェミニスト認識論・科学哲学への良い見通しを与える Anderson による本論文を取り上げた。従来の支配的な科学の営みは、多かれ少なかれ女性をはじめとする「従属的な」社会集団に不利益をもたらしてきた。フェミニスト認識論・科学哲学の主張とは、一言でいえば (1) 「状況づけられた知 (situated knowledge)」の概念による、(2) 伝統的な「客観性」への批判とまとめることができる。(1) について、本論文ではフェミニスト観点理論、フェミニスト・ポストモダニズム、フェミニスト経験主義という三つの立場から検討が加えられる。さらに (2) に関しては、認識的権威、認識的不正義、無知の認識論、徳認識論といった、伝統的な認識論への批判として登場した様々な潮流が紹介される。1980 年代以降に盛り上がったこれらの思潮は多くの批判にも晒されてきたが、それらの批判は一言でまとめれば「相対主義」の行き過ぎに対する批判であった。しかし、忘れてはならないのは、フェミニスト認識論・科学哲学は客観性や科学を否定しているのではなく、むしろそれらの男性的バイアスを是正することで、それらをより良くしようと試みているのだということだ。Anderson は本論文で、一つの「正しさ」へと向かう絶対主義でも、無数の「正しさ」があるとする相対主義でもない、ある種の多元主義を擁護している。この多元主義こそ、「状況づ

けられた知」の観点から導かれる新しい「客観性」の理論なのである。(鶴田想人)

○金森修(2000)「フェミニズム科学論」「エコ・フェミニズム」、井山弘幸・金森修編『現代科学論 科学を捉えなおそう(ワードマップ)』、新曜社、205-219頁。

他の多くの科学論の思潮とともに、金森はこれらの論考において、フェミニズム科学論とエコ・フェミニズムについての簡潔な見取り図を提示した。まずフェミニズム科学論は、実証的で普遍的で客観的だとみなされてきた西洋科学のジェンダー・バイアスを剔抉し、例えば科学者の男女比率の違い(当然男性の方が多)に関して、様々な考察を加えてきたことが述べられる。さらにその代表的な文献として、ケラー『ジェンダーと科学』、ハーディング『誰の科学? 誰の知識?』、ハラウェイ『霊長類の見方』(うちケラー以外は未邦訳)が紹介される。次に、マーチャント『自然の死』などに代表されるエコ・フェミニズムは、「女性に対する男性の支配と、自然に対する人間の支配は同型的である」というテーゼを主張する。主客を分離し還元主義的な男性原理を批判して、より有機的で主客の融和を重んじる女性原理を擁護するこの思潮は、チブコ運動やグリーンベルト運動などの社会運動にも支えられて1990年頃に盛り上がりを見せた。しかし一方で女性原理を二元論的に擁護することが、かえって女性の従属性を固定するのではないかという批判もなされた。(鶴田想人)

○L・シービンガー(1992)『科学史から消され女性たち』、小川眞里子・藤岡伸子・家田貴子訳、工作舎、第8章。

本書は主に十七、十八世紀における西欧近代科学の成立期に、女性が科学から排斥されてきた状況について記している。なかでも第八章では、ジェンダーの《文化的意味》を明らかにするため、十八世紀における性の補完性理論に焦点をあてた分析が展開される。性の相互補完性という概念は、フランス革命期に激化したいわゆる《女性論争》と同時期に提唱された。全ての人間は生まれ

ながらにして平等であるという命題と、女性が従属的な立場であることのジレンマを解消するにあたって、性の補完性理論は「女性と男性は肉体的にも精神的にも対等のものではなく、補完的に反対のもの」(p.269)であると主張した。したがって、性の補完性理論によれば新たな民主主義社会のなかで女性が母や養育者としての役割を全うすべきなのである。身体的な差異が社会的な役割の違いを因果的に規定しているという解剖学の知見がこの理論を下支えすることとなった。性の相互補完性の考え方は、女性には科学を行う能力が欠如しているという考えをもたらし、女性や女性らしさに属するものを科学から締め出し続けるための口実を提供した。他方で、植物学のような女性向きであると考えられた分野はアマチュアとして楽しむことが女性にも推奨された。(杉本光衣)

○ **Haslanger, S. (2000). Gender and race:(What) are they? (What) do we want them to be?. *Noûs*, 34(1), 31-55.**

本論文は、フェミニスト分析哲学や社会構築主義の研究で知られているサリー・ハスランガーが、ジェンダー概念と人種概念の改良を試みたものである。ハスランガーによると、分析的アプローチを用いることでフェミニストやアンチレイシストに役立つような改良が可能になる。代表して女性の定義を確認しておこう。女性とは特定の文脈において、生殖における女性の生物学的役割と考えられる身体的特徴をもつことにより、従属的な社会的立場を占める人として位置づけられる。このような事実は、女性の体系的な従属を支える役割を果たしている。反対に、従属的を特権的と言いかえることで、男性に関する定義が得られる。しかしながら、以上の女性・男性のような定義や、その他の社会的カテゴリーは不変のものではなく、私たちが戦略的に変更することもできる。ハスランガーが提唱した定義は自己理解を修正し、規範的な力について考えるための道具なのである。「ジェンダーと人種は双方とも real であり、どちらも社会的カテゴリーである」という文言にもみてとれるように、ハスランガーの説明は、性や人種にまつわる「自然」に真っ向から挑んでいる点に魅力がある。彼女の社会的カテゴリーに関する形而上学的な研究は、他の社会的カテゴリーを論じる際にも参照されるべきではないのだろうか。(杉本光衣)

○ Ray, M. K. (2015). *Daughters of Alchemy: Women and Scientific Culture in Early Modern Italy*. Harvard U. P..

本書『錬金術の娘たち』は、近代科学が誕生した科学革命期のイタリアにおいて、女性が科学的実践に関わっていたことを示している。近年の歴史研究によって、錬金術は前近代の人々にとっての知の伝統として科学史に再配置され、現代人の視点から恣意的に錬金術と化学を分けない見方が示されてきた。本書では、近代科学の黎明期であり、錬金術の黄金期でもある初期近代を生きた女性たちが、家庭で、宮廷で、そして知識人たちのネットワークを通じて、医学的あるいは実用的な錬金術の実験を行っていたことが示される。そうした女性たちの一人であったミラノのスフォルツァ家のカテリーナの実践は、メディチ家が錬金術や医学に長く深く関わるきっかけとなった。また女性たちは、アカデミーやサロン、書簡のやりとりの中で科学的なテーマや女性のあり方について議論し、文学作品の中では自然哲学の知識を用いて男性との知的平等を主張した。その例として、科学革命期の重要人物であるガリレオの書簡を分析することで、当時数少ない女性のアカデミー正会員であったマルグリータ・サロッキのサロンにガリレオが出入りし、書簡を通して彼女に科学的な問題に関する意見を求めていたことが明かされる。著者は文学と文化の分析を組み合わせることで、初期近代の科学における女性の不可欠で重要な仕事に新たな光を当てた。(須田千晶)

○ Bluhm, R. (2021). Neurosexism and our understanding of sex difference in the brain. In S. Crasnow & K. Intemann (Eds.), *The Routledge handbook of feminist philosophy of science* (pp. 316–327). Routledge.

本論文は、性差別の助長やジェンダー理解の阻害に繋がるような神経科学的研究の様態が現代の性差研究にも見られることを指摘する。こうした研究様態は「ニューロセクシズム」と呼ばれるものであり、頭骨の性差から女性の劣等

性を示そうとした19世紀の頭蓋学（craniology）はその典型例である。ニューロセクシズムには「科学的ニューロセクシズム」と「社会的ニューロセクシズム」がある。前者にはバイアスがかかった研究枠組みや手法、推論、またそうした実践がもたらすジェンダー理解への悪影響が含まれ、後者には性差別的な研究動機や、研究成果の無責任な発信による社会的悪影響が含まれる。また、研究批判を政治的動機のみにもとづく非科学的主張として退けるという社会的かつ科学的なニューロセクシズムもある。性ホルモンによる脳組織化の理論や脳画像技術、進化心理学に支えられた現代の性差研究にかんしても、データ解釈におけるバイアスや生得的要因による説明への偏りなどの科学的ニューロセクシズムが指摘される。また、性差研究がメディアにより無責任に利用されるといった社会的ニューロセクシズムも指摘される。さらに、研究への批判を非科学的とみる（実態に反した）言論もある。頭蓋学ほど明らかではないが、現代の研究にもニューロセクシズムの影響は見られるのである。（藤原諒祐）

また、本研究会で行った個人の研究発表は以下の通りである。

○修士論文構想：「生殖をめぐる政治——チェコ現代史から——」（発表者：村瀬）

発表者は、チェコ共和国を中心として今日の欧州で生じている「国境を越えたリプロダクティブ・サービス（cross-border reproductive service; CBRS）」をテーマとした修士論文の序章および第1章を発表した。目下、チェコでは匿名配偶子提供や着床前診断、代理出産といった諸外国では禁止／規制されている生殖技術を利用することができ、殊に代理出産に関しては法規制がない。ゆえにドイツやイギリスをはじめとする諸外国から「不妊」のクライアントが、あるいはウクライナから代理母が、国境を越えてチェコを訪れる。CBRSの主因となっている代理出産の法規制の不在について、その理由を社会的・歴史的視点から明らかにすることが修士論文の目的であった（2021年12月提出済）。

フェミニズム科学論においても、生殖技術は欠かせないテーマである。ハーディング（1991）が述べるように、生殖補助医療や断種、人工妊娠中絶、避妊

などを含む生殖の医療化には、常に男性中心主義的規範が反映されてきた。女性たちの健康はしばしば危険に晒され、身体をコントロールするパワーは彼女たちから剥奪されている。そこでの医学的実践や科学技術の関与の仕方を明らかにすることは、本研究会での発表を通じて見えた今後の課題である。(村瀬泰菜)